新書紹介

居宅老人の生活と親族網

P・タウンゼント著　　山室周平監訳

垣内出版　B 6判　373頁

1,800円

この本は，副題にもあるように，福祉国家イギリスの首都ロンドンの労働者階級住居区域―イーストロンドンにおける居宅老人をめぐる親族網についての調査報告である。

まず，調査の方法であるが，アンケート調査のように類型化し，単純化された所で単に全体を数量的に把握することを避け，老人を含む家族内の複雑な人間関係を解明するため，個々の老人の人間関係，性格，行動形式についての十分な理解のもとに，調査票などによらない柔軟な質問の方法をとっている。これは，まさに著者の老人に対する限りない愛情を如実に示すもので，この本の説得力ともなっている。

内容は2部から成っており，第1部「老人の家族生活」では，家族関係が後退し，稀薄化され，いわゆる核家族化しているといわれる大都市の中で，78%の老人が毎日子供たちに頼っており，日常生活において老人が面倒をみてもらう家族システムが存在し，老人が家族集団の不可分の一員として位置づけられている事実を豊富な資料によって解明している。第2部「家族と老人の社会問題」では，退職による所得の激減と家庭内における地位の変動が述べられ，老人において幸せとは，家族集団の不可分の一員として，住みなれたコミュニテイで生活することであるということから，老人を含む3世代家族に対する住宅政策，隔絶した大施設収容政策から老人のコミュニティに対する深い愛着に根ざした居宅サービスへの転換，再開発計画への反省等福祉政策への貴重な示唆を含んでおり，直接老人福祉にたずさわる方々のみならず，自らの両親を含んで何らかの意味で老人とかかわりのあるすべての方々の一読をおすすめいたしたい。

〈企画調整局調整課長　岡部重之〉

〈あとがき〉

前号の「福祉問題再考」を編集していくうちに，家族の問題が浮かびあがってきました。いわゆる都市の核家族化が進むにつれ，今まで家族が当然のこととして果してきた機能の一部が，家族外の私的・公的機能に移行する傾向がでてきています。たとえば，老人扶養の問題や婦人の就労による育児の問題などがそうですが，日本のように，それを受けとめる社会的条件が十分でない場合には，そのしわよせが家族にきがちです。また，そのような中では，家族内の役割や結びつきも，当然変化のきざしをみせていると思われます。しかし，家族が本来的にもっている力は何ものにも代えがたいという側面もあり，家族は今，考えられるべき時期にきているといえましょう。そこで，現在，都市に生活する家族はどのような変化を受け，どのような問題をかかえているのかをテーマに，この特集を組んでみました。

編集の途中，今度の季報のテーマを聞かれて，「都市と家族の問題」と答えると，皆一様にとまどった表情をみせましたが，なるほど，行政の仕事という面からみるとこのテーマはかなり遠いという感じをもつのかもしれません。しかし，たとえば，地図上の一本の計画路線の裏に，またひとつの要求や陳情の背景に，生々しい生活があり，そこにも家族の問題がひそんでいることを思い起こしながら読んでいただきたいと思います。編集にさいしては，山室周平先生に暖いご協力をいただき，深く感謝しています。

なお，今回からデザインが変わりました。表紙は白，字色だけを，毎年変えていきます。デザイン・レイアウトは中垣信夫氏にお願いしました。　（中川）